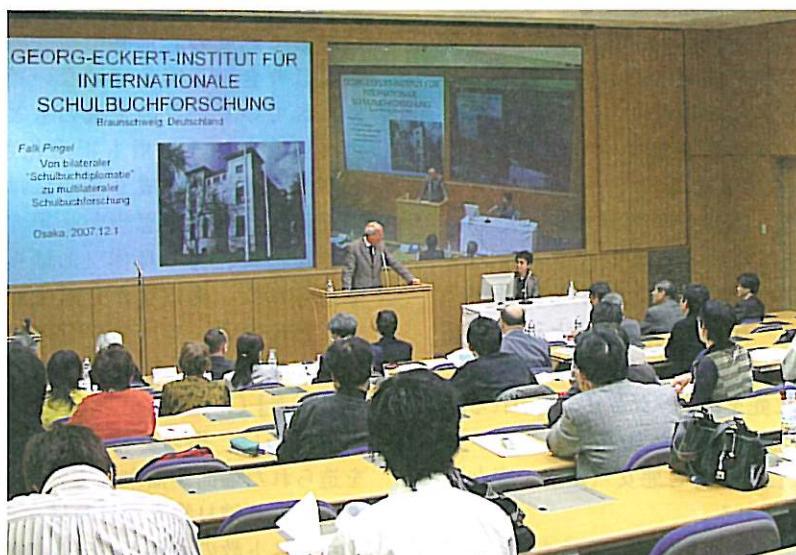


# 室報



関西大学人権問題研究室・大阪ドイツ文化センター共催国際シンポジウム

|                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| ◀目次▶                    | 新研究員紹介.....7             |
| 「ペール」の下の素顔.....2        | 2007年度人権問題研究室 公開講座.....8 |
| 教科書問題で国際シンポジウムを開催.....6 |                          |

# 「ベール」の下の素顔

イスラム教とキリスト教の女性に対する固定観念—女性の何を「隠させる」のか、  
何を女性のなにを「あばきだす」のか

金 谷 千慧子

## 1. キリスト教のベール

### 1 マグダラのマリアの官能と波打つ髪

『キリストの棺—世界を震撼させた新発見の全貌』(シンハ・ヤコボビッチ著／沢田 博訳：イースト・プレス社)は『ダビンチ・コード』の続編ともいわれる。エルサレムでイエスの家族（イエスとマグダラのマリア、息子ユダ）の2千年前の墓が発掘され、最新のDNA分析や統計的解析調査で、イエスと家族の可能性ありとの結果が出た。キリストは聖母マリアの処女懐胎で誕生したのではなく、改悛した売春婦とされるマグダラ（遠い地という意）のマリアはキリストの妻であることを証明するものである。ベールで髪を包まれる聖母マリアとベールをはぎ取られるマグダラのマリアの意味を根底から覆す調査でもある。

聖書の記述では彼女が娼婦であったという直接の記述はない。しかしマグダラのマリアは悔い改めた娼婦だと分かる符号が、ベールなしで、裸にされ、官能と波打つ長い髪を描かれる。髪は官能と誘惑の表現としてぐねぐねと蛇をイメージさせて描かれる。宗教画とその流れで描かれるルネッサンス絵画にも、女性は聖母と悪女（娼婦・魔女）として多数登場する。

中世以降は異端者を魔女（男性も）として抹殺するという歴史が加わる。それ以前の魔女は高貴に描かれている。



図1 ティツィアーノ  
『マグダラのマリア』  
(1530年代初め)



図2 フーケ『聖母子像』  
(1450年頃)

### 2 「隠させる」聖女、「あばきだせる」魔女

女性は性を「隠させる」聖女と「あばきだせる」悪女（魔女）として描かれるが、それは画家たちがお抱えの諸侯とカトリック教会の意のままに、権力（男性）の欲望を描いたのである。それにより女性一般のイメージを男性の性的対象として固定することに貢献した。

キリスト教も父権制である。教会の指導者に教父また神父など、「父」をつける。彼らは俗世間を捨て独身で過ごす。女性がいない教会で、女性は遠い存在となる。女性に対して過度の恐怖感や嫌悪感、逆に憧れが混じり合い、実在ではないイメージがつくられていく。この土壤のもとで聖女＝母親＝処女という矛盾も正当化されていく。しかしこの矛盾が成り立つには、女の男への従属、女性蔑視思想が必須である。神は男のために、男の身体（あばら骨）から女を造られた。男は女から誕生したのでもないことになる。ローマのシスティナ礼拝堂にはミケランジェロの『アダムの創造』『エバの創造』(1512年)があるが、そこには神は男のために、男の身体（あばら骨）から女を造られた場面が描かれている。

### 3 女性が被り物をつけねばならない根拠

キリスト教の女性とベールの根源を辿る。女性はキリスト教の信仰の証としてかぶるのではなく、女性本来の姿を隠すためにかぶるのである。聖パウロの言葉（1コリント11章）は以下である。

「私は、あなたたちに、次のことを知ってもらいたい。すべての男の頭はキリストである。女の頭は男である。キリストの頭は天主である。頭に被り物をして、祈りや預言をする男はみなその頭を辱めている。ところが、頭に被り物をしないで祈りや預言をする女もみな、その頭を辱めている。その女は剃髪しているのと同じだからである。女が被り物をしないなら、髪も切ればよい。しかし髪を切ったり剃ったりするのが女の恥であるなら被り物をしなさい。男は天

主の姿であり光栄であるから、頭に被り物をしてはならない。しかし、女は男の光栄である。男が女から出たのではなく、女が男から出たのであって、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからである」。

#### 4 魔性と聖性の誕生

狂気の魔女狩りが横行した中世末から近世初め、女性を次々と火刑台に登らせた時代には、一方でその美德と超自然力のゆえに称えられ崇められ、聖女として讃美されることも同時に増えた。時期が重なるだけではなく魔女と聖女の超自然力は酷似している。裏返しの関係なのである。極端な女性嫌悪と女性崇拜を並存させつつ、キリスト教文化は、ヨーロッパ中世・近世の男の女に対する偏見の歴史を形成してきた。その偏見の歴史に対して、普通の、生身の女性たちは、真正面から、あるいは斜に睨みながら、抗いながら生きたのももう一つの歴史がある。

## 2. イスラム教のベール

### 1 イスラム教のベールの意味

コーランでは、女性は親族以外の男性にその「美」を見せてはならないという。ベールは男女を隔てるカーテンで、女性性を隠すものである。イスラム教徒の女性として規範を守り、男性を誘惑しないことをあらわす。コーラン第24章31節は以下のようにいう。

「慎み深く目を下げて、陰部は大切に守っておけ。外部に出ている部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には被いを被せるよう」。

コーランのこの言葉が、イスラム社会に暮らす女性たちの生き方にどれだけ影響を与えてきたか計り知れない。女性は家の外で自分の魅力（性的）を人に見せてはならない。家の中では、チャドルとベールはつけない。そのための最善の方法は、女性は私的空间（家庭）の外に出ないことである。やむなく公的空間に出るときには、その「美」を隠すためにベールを被らねばならないのである。

「ヘジャーブ」は「かくす」「へだてる」のアラビア語の動詞(hajaba)の派生語であり、

「チャドル」は「大きな黒布」のペルシャ語である。

「ブルカ」はアフガニスタンのタリバンが強制した全身を覆うもので、きわめて特異である。

ベールの義務は地域によって異なり、サウジアラビア、イランは着用が義務、アフガニスタンは義務ではないが例外なく着用している、エジプト、トルコ、インドネシアなどでは個人の選択である。髪だけを被う、顔も被うものや足首まで被うものと多様である。しかし、この服装でスポーツはまず無理。エジプトでは公立学校には「体育」の時間割はないという。スポーツの楽しみを女性は味わえない。女性は、公的場である教育を受けないし、職業を持たない。そうなれば男性の所有物になる生き方しかできない。

### 2 ベール・チャドル・ヘジャーブの歴史

イスラム時代以前にはベールの絵入りの証拠はない。ヘジャーブはペルシアの習慣が起源で、地位階級を表わし、それは古代の地中海と中東の習慣の継続である。身分の高い女性はベールを着用し、自らを隔離してしまった。使用人と売春婦にはベールを禁止していた。ギリシャ・ローマ時代では、妻や愛人を大衆の視線から隠したが、馬車や駕籠に隠し、女性にチャードルを着せたのではない。

iranではホメニイ師の教えに従い、黒がチャードルの正式な色としているが、薄い色や違った色を好み、黒のチャドルの着用へ抵抗する女性もいる。「ベール」は時代を問わず、常に政争の具に利用される。時の権力は、公衆の場で女性たちが何を着るべきかを強制するに躍起になる。2008年の部族対立デモにも「ベールをしない女性排除」と叫んでいる。あちこち動き回る道徳警察が女性たちにヘジャーブを強要する。これだけは最も厳密に実施される。



図3 クレオパトラ7世  
(紀元前31年死)  
にはベールはない



図4 クレオパトラ7世

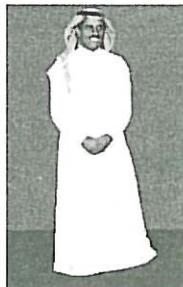


図5 アラブの男性の装束トーバ



図6 アラブの女性の装束チャドル

### 3 4人の妻

コーランには男性には同時に最大4人まで妻を娶ることが許されている。コーランは重婚の承認以外にも離婚を宣言する権利を男性にのみに認めているなど、婚姻の男性優位は明らかである。「モノガミー」か「ポリガミー」(一夫多妻)かを男性が決める。コーラン第2章223節は以下のようにいう。

「女というものは汝らの耕作地。好きなように自分の畑に手をつけるがよい」。

### 3. フェミニズムとベール

#### 1 第1波・第2波フェミニズム

19世紀以降、第1波のフェミニズム運動は女性参政権の獲得が目標であった。第2次世界大戦直後に多くの国が獲得し、その後も続いたが、未だに家庭内に閉じこめられている女性が多い。21世紀に参政権を認めている国があり、その多くは女性たちがベールで身を隠しているイスラム教のアラブ系の国である。

1970年以降の第2波フェミニズム運動は、性別役割分業から解放し、女性を公的分野、労働への参加を大幅に進めた。西洋型の女性の解放はイスラム圏にも伝播していった。欧米の影響との批判もあるが、ベールを「かぶらない」「脱ぐ」も進んでいった。

#### 2 1970年代の国連中心の女性運動

1970年代以降の世界女性会議での私の体験であるが、第3回大会（ケニア）では、ナイロビ大学のキャンパスで、黒装束の女性たち（第1・2夫人）が連れ立ち、後方を

監視するように男性が見守っていた。第2回大会（デンマーク）のワークショップでは、ベールを脱ぎ捨て自由を宣言する女性がいたり、インドの焼かれる花嫁のスライドも見た。アフリカ・アラブ地域に多い少女の性器切除（Female Genital Mutilation=FGM）の実態も聞いた。その場では欧州の女性たちが押しつけてはいけない、次回（1985年）までにアフリカ52（現在53）カ国で結論をだそうということになった。しかし今もアフリカの28カ国で、毎年200万人が、1日6,000人の少女が性器切除の犠牲になっている。



図7 ナイロビ大学でイラン女性たち（1985年筆者写す）

#### 3 バーレーン王妃の発言

保守的なイスラム教君主制をとる湾岸諸国の中で、2002年女性の政治参加を得たバーレーン国のサビーカ王妃（イギリスへ留学経験）は、「2006年の総選挙で女性議員が1人当選し、これで2人の女性閣僚が誕生した。女性は民主政治で前進を遂げた。女性は国づくりの有能なパートナーだ。女性の権利拡大はイスラム教と矛盾しない」と主張しているが、女性のベールと男女平等は理論的にも、実質的には関連が深い。

サウジアラビアは女性の参政権はない。車の運転も禁じられている。公共交通が少ない車社会では女性の行動は制限される。ドバイ空港（アラブ首長国連邦）では、全身黒装束（ヘジャブ）の女性たちとより多くの権威的な白装束（トーバ）の男性たちという白黒の集団がいた。白装束は、金遣いも人使いも荒く、ヘビースモーカーが多いと聞く。カフエテリアはたばこの煙で臭い。眼以外は全部真っ黒の女性が携帯電話がかかってくると口のマスクをはずして話していた。何かが変わるものかもしれない。



図8 バーレーン王妃と  
アラブ地図（読売新聞・  
2007年8月1日付）



図9 カイロ大学文学部前でベール  
の女性たち（筆者写す）

#### 4 美術史家「若桑みどりさん」の死

女性の視点で美術評論を書き続けた若桑みどりさんが07年10月死去。1980年『美術の中の裸婦—寓意と象徴の女性像』が彼女のスタートだったという。実は私もこの書で、なぜ女性はいつもヌードで描かれるのかと疑問を持った。その後『女性画家列伝』(岩波新書1985)、『象徴としての女性像—ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』(2000筑摩書房)等で主張し続けてきた。本書を開き、彼女を偲びながらまとめをする。

#### ●聖母とエバ（イブ）と大地母神（女神たち）

大地母神（女神）として崇敬されてきた女性は、その聖なる性的快楽と生殖力で崇拜されてきた。しかし出産能力のない男性を中心とする文化では、女性の身体は貶しい欲望と淫欲（それゆえ魅力的で危険）であるとされ、侮辱され周辺へ追いやられ、マイナスの女性像をつくりあげていく。「女の性は劣等で反知性的な肉体的本性だと固定していくのである。

#### ●文化の社会的役割

性は、宗教・階級・人種・民族とともに、社会秩序を構成し権力関係を築く基本である。性は女性のイメージを生産し表象する。それが大量に生産・消費され、その社会の広範なグループに共有され一般化すると「文化」になる。この文化の担い手は男性である。男性が創り出し維持してきた仕組みの中で女性は、文化に参加することは不可能であった。女性は表象の中で常にものいわぬ客体であったが、実際の女性たちのイメージでないことはいうまでもない。女性は男性

家長の保護・監視の下、家庭内部で生涯を送る役割を道徳や宗教、法律で固定されてきた。家父長制を維持する権力の仕組みのなかでつくられてきた歴史は、「男性の歴史」であり「男性の美術史」「男性の宗教」にすぎない。

#### ●女性の何を「隠させ」、「あばきだす」のか

女性の男性への従属、女性蔑視という固定観念の下、女性の何を「隠させ」何を「あばきだすのか」。それはジェロームの『奴隸市場』（制作年不詳）がよく物語っている。ハーレムという最高権力者の周辺に快楽のためだけに多くの女性が囲われている禁断の場所がある。そのハーレムの近くには必ず奴隸市場があった。2007年の年末、イスタンブールのエジプシャンバザールをダラタ橋側に出たところにあった奴隸市場跡を見に行った。勿論今は跡形もないバスター・ミナルに続く広場の一部になっている。戦いに負けた地域の少年もここで売られるが、少女はまずベールや身にまとう布をすべて剥ぎ取られ、見世物として無防備に立たされ、検査と称して引きずり回される。艶があるように見せるためバターがたれ落ちるほど塗られたという。ハーレムの女の多くはここから供給された。「あばきだす」「引き剥がす」ときの男性のゆがんだ瞬時の快楽のために、女性は一生涯、何世紀にもわたって、彼らされ、隠され、拘束され、身体の自由、精神の自由、生きる自由を奪ってきた。ペールはその象徴である。

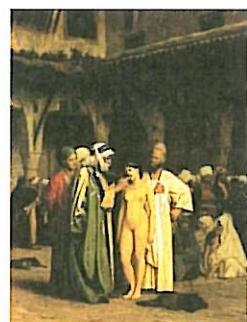


図10 ジェローム「奴隸市場」  
制作年不詳

#### 参考文献

- ・岡田温司著『マグダラのマリアーエロスとアガペーの聖女』中公新書
- ・桜井啓子著『イスラームの女性』別冊環④『イスラームとは何か—「世界史」の視点から』藤原書店
- ・図1、図2、図10は『美術の中の裸婦』全12巻集英社（1980年）より引用

（委嘱研究員）

# 教科書問題で国際シンポジウムを開催

宇佐美 幸彦



2007年12月1日（土）に関西大学人権問題研究室と大阪ドイツ文化センターの共催で、国際シンポジウム「歴史認識と歴史教育—歴史教科書をめぐる議論とドイツ・ポーランド接近の道」が千里山キャンパス尚文館AV大教室で開催された。

13時から関西大学芝井啓司副学長、大阪ドイツ文化センター・ペートラ・マトゥシェ館長から挨拶がなされたあと、ゲオルク・エッカート国際教科書研究所（ドイツ）のファルク・ピンゲル副所長「二国間の『教科書外交』から多国間の教科書研究へ」、ワルシャワ大学（ポーランド）のウォジミエ・ボロジェイ教授「1972年から2007年におけるドイツ・ポーランド教科書委員会」、琉球大学の高嶋伸欣教授の「日本における最近の歴史教科書問題—アジアとの共生の視点から」の三つの講演がなされた。休憩のあと、16時30分からは全体討論に移り、田中欣和文学部教授（人権問題研究室長）と高明均外国语教育研究機構教授からコメントとして二つの関連発言がなされた。参加者は約200名で、北海道や関東方面を含めて学外からの参加者も多数あり、国際的な教科書問題への関心の高さが示された。長時

間のシンポジウムであったが、発言や質問と感想の文書記入もたくさんあり、18時の終了時間まで熱心な議論が行われた。なお田中欣和教授、杉谷眞佐子教授、豊田真穂専任講師が交代で司会を務め、通訳は杉谷眞佐子教授、佐藤裕子教授、宇佐美幸彦教授、杉岡数幸氏、カイト由利子教授が分担して行つた。

講演とその後の討論では主に次の点が強調された。①政治的な対立点があつても、研究や教育の分野では国際的な交流や共同作業が可能である、②「歴史教育法」の分野を発展させ、歴史教育の方法を工夫し、それを実行する人材（教員）を養成することが重要である、③歴史の教科書は多面的な見解を提示することが望ましい、等である。パレスティナとイスラエルのような対立の激しい国家間でも歴史教育者は共同作業に取り組んでいる。東アジアにおける今後の教科書問題での国際的な共同作業にも多くの参考にすべき点を明らかにしたシンポジウムであった。このシンポジウムの詳しい内容については、研究室紀要に掲載される



国際シンポジウム会場の参加者たち

予定である。

なおNHKがドイツのゲオルク・エッカート研究所の国際的な歴史教科書作りを重要な活動と考えて、この研究所で指導的な役割を担っているピンゲル博士に注目し、同博士を密着取材して、シンポジウム当日はNHKの録画撮影が会場で行われた。放送は2007年12月15日NHK・BS2番組で放映された。

さらに12月3日(月)14時40分から千里山キャンパス第1学舎E210教室にて、文学部・人権問題研究室共催でファルク・ピンゲル博士の講演会「国際的な『教科書見直し作業』を通じての平和教育の可能性—ゲオルク・エッカート研究所の取り組みからの実例」が開催された。通訳は杉谷真佐子教授、司会は宇佐美幸彦教授が務めた。ピンゲル博士はスライドやDVDの映像で学生向けにわ



司会の豊田研究員

かりやすく解説し、参加した学生からは歴史教科書のあり方について深く考えさせられたという感想などを得ることができた。学生からも質問が提出されるなど、活発な講演会であった。

(文学部教授)

## 新研究員紹介



植村 邦彦

このたび人種・民族問題研究班に参加することになりました。1994年に関西大学に着任し、経済学部で「社会思想史」という科目を担当しています。専門は近代ドイツ社会思想史で、現在の研究テーマは19世紀末ドイツの「ユダヤ人問題」論争です。

ヨーロッパでは、中世以来18世紀末にいたるまで多くの国家がキリスト教を国家原理とし、宗教的マイノリティである「ユダヤ教徒」の市民的・政治的権利を制限していました。それに対して、「信条の自由」を人間の基本的権利として掲げてユダヤ教徒の「解放=同権付与」を実現したのが、フランス革命でした。

この革命の波及によって、ドイツでも「ユダヤ教徒の解放」が始まります。それは1812年のプロイセン王国の「ユダヤ教徒解放勅令」に始まり、1871年にドイツ帝国が「信条の自由」原理を憲法に採用することによって最終的に達成されます。しかし、この解放の達成によって、かえって現代にまで持ち越される問題が生じることになりました。

宗教の違いを理由にして差別することが許されなくなると、キリスト教保守派の側から、ユダヤ教徒が「われわれ」と異なるのは「宗教」が違うからではなく、「民族」が違うからだ、という主張が現れます。その違いはさらに「国民性」から「家系」に拡大されて、「ユダヤ人の血」が流れている「ユダヤ人種」という存在が想像／創造され、こうして19世紀末に人種主義的な「反ユダヤ主義=反セム主義」が成立します。

解放達成以前のユダヤ教徒は、改宗して

キリスト教徒になれば、個人的には差別を免れることができました。しかし、「人種」は定義上変えようがありません。いったいどのような論理に支えられて、同じ人々を差別する根拠が「宗教」から「民族」へ、さらには「人種」へと短期間に急速に転回

していったのか。さまざまな論争における言説の変化を追跡しながらその論理を分析することが、現在の研究課題です。それは、私たち自身の「他者」認識の問題点を批判的に反省することにもつながると考えています。

(経済学部教授)

## 2007年度人権問題研究室 公開講座

| 回  | 日 程       | テー マ                          | 講 師                  | 会 場                  |
|----|-----------|-------------------------------|----------------------|----------------------|
| 49 | 5月25日(金)  | 「結婚差別」のりこえ方を考える               | 人権問題研究室長<br>田中 欣和    |                      |
| 50 | 6月22日(金)  | ドイツの外国人問題                     | 文学部教授<br>佐藤 裕子       | 尚文館マルチメディア<br>A V大教室 |
| 51 | 10月26日(金) | 生活支援工学への期待<br>—実践的な工学的解法のために— | システム理工学部准教授<br>倉田 純一 |                      |
| 52 | 11月16日(金) | ペールの下の素顔                      | 委嘱研究員<br>金谷 千慧子      |                      |

※時間は、午後1時～午後2時30分

### 編集後記

『室報』第40号をお届けします。今号では、イスラム教とキリスト教における女性観を「ペール」という視点から考察した金谷さん(本研究室委嘱研究員)の論考と、昨年12月に本学で開催された国際シンポジウムの報告などを掲載しました。前者では多くの図版を載せることができ、『室報』の特徴を生かせたのではないかと考えています。なお、国際シンポジウムの詳細については、6月発行予定の本研究室紀要で報告されます。

(石元清英)

関西大学人権問題研究室室報 第40号  
2007年12月31日発行  
発行／関西大学人権問題研究室  
〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号  
電話(06)6368-1182  
FAX(06)6368-0081  
<http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>